令和８年度 第4回伊丹市学校教育審議会（幼児教育部会）
議事録（要旨）

１ 日 時　令和８年10月５日（金）13時30分～15時35分

２ 場 所　伊丹市役所 2階 201会議室

３ 出席者
（委 員） 卜田 真一郎（大阪常磐会大学短期大学部 教授）
深野 康久（大阪教育大学教職大学院 元教授）
岡田 朱世（武庫川女子大学 講師）
今村 貴子（市立おぎの幼稚園 園長）
川阪 由紀（市立神津こども園 園長）
石川 雄巨（いずみ幼稚園 園長）
中谷 恭代（荻野クレヨン保育園 園長）
山内 彩乃（市立おぎの幼稚園 PTA）
村瀬 友実（市民公募委員）

（事務局）伊丹市教育長
伊丹市教育委員会事務局こども未来部 部長
伊丹市教育委員会事務局こども未来部幼児教育保育室 室長
伊丹市教育委員会事務局こども未来部幼児教育保育室(教育保育担当)主幹兼未来教育プロジェクト主幹
伊丹市教育委員会事務局こども未来部幼児教育保育室(幼保連携担当)主幹兼未来教育プロジェクト主幹

（傍 聴） 4名

４ 次 第
① 開 会
② 議 事

５ 議 題
「 公立幼児教育施設の適正規模・適正配置について 」 （議事録別紙）

6 議事録（要旨）

＜議　事＞

【部会長】

それでは会議の方に入りたいと思いますが、まずこれまでの振り返りを少しさせていただきたいと思います。

前回まで第2回、第3回で2回にわたり、幼児教育部会の中で議論する諮問事項の一つ目の「幼児教育のあり方、どのような幼児教育を目指すか」についてご議論をいただきました。

その結果、公立幼児教育施設に期待される役割として4つの点が確認されました。

一つは特別支援教育の先導的な役割を担うことが望ましい。

二つ目に幼児教育の研究研修の先導的な役割を担うこと。

三つ目ですが、幼保小連携の先導的な役割を果たすことが望ましい。

そして四つ目は家庭・地域と連携した子育て支援拠点として重要な役割であるということでした。

また一方で預かり保育の実施の拡充、満三歳児保育の実施についても議論されましたが、その意義や必要性を認めつつも、公立として何を優先的に担うべきかという視点から、今後も慎重に検討を進めていく必要があるということがまとめとして整理されたかと思いますが、よろしいでしょうか。

（異議なし）

ありがとうございます。

それでは本日から次回までの2回にわたって、諮問事項の二つ目ですね。「公立幼児教育施設の適正規模、適正配置、目指す教育を実現するために必要な環境」について議論をしていただきたいと思います。

ただし本日は適正規模、適正配置についての結論を出すことが目的ではありません。

本日はこれまでの議論、すなわち伊丹市が目指す幼児教育のあり方、公立幼児教育施設の果たすべき役割を踏まえながら、適正規模・適正配置を考える際に何を大切にすべきかという視点を整理したいというふうに思っておりますので、よろしくお願いいたします。

では最初に、本日は事務局から資料が準備されておりますので、資料に基づいて事務局から詳しくご説明をお願いいたします。

（事務局から資料の説明）

【部会長】

はい、ありがとうございました。では、今ご説明いただきました資料の内容についてご質問等ございますでしょうか。よろしいでしょうか。

また何かありましたら議論の途中でもお聞かせいただいたらと思いますのでよろしくお願いします。

では議論の方に入ってまいりたいと思います。

資料12ページのところでご紹介いただきました視点と議論のポイントというあたり、ここに沿ってという形で進めていきたいと思います。

まず一つ目の「子どもの育ち」というところから議論ができたらなというふうに思います。

まず最初に、施設や運営の話ではなく、子どもの視点から考えてみたいというふうに思います。

私たちはこれまで、「夢中になってよく遊び、よく考える子ども」を育てるために、どのような幼児教育を目指すのかといった幼児教育の姿について議論をしてまいりました。そのような子どもたちを育てるためには、どのような集団環境が望ましいのかというあたりから、ご意見をいただきたいと思います。

まず一つ目ですが、子どもの育ちという観点から考えたときに、幼児期にどのような人との関わりが必要だというふうに思われるのかというあたりから議論ができたらなというふうに思いますので、どなたからでも結構ですので、「こういうことが大事じゃないか」、あるいは「こういうことを大事に実践しています」というようなお話も出てくるかと思いますので、また保護者という立場とか、市民の方の立場とか、いろんな立場からご意見をいただけたらと思います。

どなたからでも結構です。いかがでしょうか。

【委員 A】

義務教育ではないけれども、幼児教育施設に、なぜ家庭からたくさんの子どもたちが来てくれるのかなと思うと、やはり家庭では経験できないことをするために来てくれているのだろうなということを思っています。

幼児教育施設に来ると、同学年の友達もいるし、異学年の友達もいるし、保育所・こども園だと０歳から６歳までいたり、小学校と交流していたら大きい年齢の友達と出会うということもあるし、地域で施設は違うけど、いろんなお友達と出会うということもあるなと思いながら聞いていました。

幼児教育施設なので保護者が必ずついてくるので、保護者と、自分のお家のお母さんとお父さんだけじゃない、いろんなお友達の保護者と出会ったり、そういうこともとても人との関わりでは大事だなと思うのと、地域とつながりがあると、お友達のお母さん、お父さんではないけれども、近くの地域の方たちに大事にしてもらったり、声をかけてもらったり、そんなことを保育施設に置きながら関わっているなということを、ざっくりと今思っていました。

【部会長】

ありがとうございます。実際そうですよね。なかなか地域の中でそういう人と出会うという機会そのものが今なくなっているのかなと思うのですが、実際どうでしょうか。園だからこそ出会えるというところもあるのではないかと。

保護者の方のご意見はどうでしょうか。

【委員 B】

いや、それこそ昔と今で、昔だったら同じマンションのおじいちゃんおばあちゃんが声をかけてくれて、「おはよう」「行ってきます」ができたのですが、今は「知らない人に声をかけられたら逃げなさい」に変わってきたので。

そういう意味では、幼稚園で、言い方はすごく悪いかもしれませんが、保証されているというか、入っていただいても大丈夫というか、安全というか、安心できる方と子どもが関われる場ができるのはすごくありがたいなと思います。

そこでつながったから、今度小学校に上がった時に、「幼稚園に来てくれた誰々さんだ」とか、地域の交流が継続してもらえるのは、保護者としてはありがたい関わりだなと思っています。

【部会長】

ありがとうございます。確かに地域と安心できる形で出会えるという意味では、幼児教育施設の持っている役割って大きいなというふうには思うんですが。

【委員 C】

やはりその辺りは関係性の違いによるものだと思いますし、就学前教育の基盤に関わる大切な部分ではないかと考えています。

今、特に意識しているのは、これからの子どもたちが社会の中で生きていく力を育むことです。例えば、難しい課題に立ち向かったり、問題解決に向けて仲間と協力したりする力は、ここで示されている「協同性」とも深く関わっています。

そのためには、幼少期のうちから「さまざまな意見や考え方があること」や、「自分とは異なる人がいること」を知り、お互いの違いを認め合う経験を積むことが大切です。そして、そうした違いを踏まえながら対話し、話し合い

を通して考えを深めていく力を育むことも重要だと思います。
　就学前教育の場は、まさにそのような力を養う場であり、私自身も現在、特に大切にしている視点の一つです。

【部会長】
　ありがとうございます。多様な意見に出会うとか話し合うという機会というのは、なかなかそうですよね。集団の保育の場でないと難しいところですよね。
　年齢によって段階があると思うのですが、何歳ぐらいから、どういうふうに意識されているのでしょうか。特にこども園の場合は、より小さなお子さんからおられるので、そのあたりっていろいろだと思うのですがいかがでしょうか。

【委員 C】
　だいたい 2 歳までは、教育要領の中では「友達」という名義がなくて、「周りの子ども」という名義の仕方をされているのですが、あまり個人の考え、主張、自己発揮というのがすごく 2 歳ぐらいまでは強いかなと思います。
　ですけれども、3 歳から「友達 」という名義にされているので、友達を意識したりとか、自分だけじゃないというのを意識し始めるのが 3 歳ぐらいからかなと思います。
　3 歳ぐらいから難しいことは何もないんです。年齢とか発達に合った話し合いだったりとか、「どう思う?」とか、「あなたはどう思う?」「私はどう思う?」とか。けんかとかもよくあって意見を言い合って、それぞれの主張もあるのですが、そういうのが目立ってくるのは、だいたい 3 歳児ぐらいからかなと感じています。

【部会長】
　ありがとうございます。他にもいろいろ出てきそうなので、まずはいろいろ出していただけたらと思うのですが、いかがですか。それぞれの現場で大事にされていることなどお願いします。

【委員 D】
　そうですね。子どもが家庭以外の大人と接する機会というのは、やはり今の時代で言うと、幼稚園、保育園、こども園、こういうところが中心になるというか、特に日常的に同じ人間として接する大人というのは、それ以外の場ではなかなか接する機会が少ないですからね。
　そういう意味では、その集団、ここにある「子どもの育ち」「集団経験」、それは施設内に限らずですね、施設を中心として接する機会があるということで言えば、そのような施設が果たす役割というのがとても大切になるのかなというふうに感じています。
　それと、最初の方も説明がありましたけども、平成 26 年に審議会の答申をいただいて、例えば複数学級ですとか 20 人以上ですとか数字が出されていますけれども、今回は保育所も含めた幼児教育施設という枠組みの中で議論するということであれば、小規模園ですとか、そういう施設も含めて、適正規模・適正配置という視点を考えていかないと、じゃあ保育所はいらないのかという議論になりかねないと思います。
　そんなことは全くないですし、小学校でのいろんな結果、例えば学力の結果なんかを見ても、幼稚園と保育所の差があるかと言えば、そういう有意差は出ていないということも踏まえて考えると、ここではもう少し丁寧な議論の必要があると思います。
　ただし、前回議論された一定の規模の集団があることが、子どもにとってはプラスになるだろうなというのは、おそらく視点として大事かなと思っています。ただ、そこのバランスをどうできるかということは、答申の中でうまく反映できたらいいかなと思っています。

【部会長】
　ありがとうございます。以前の答申で、特に今後の方向性で示されている内容の時代から考えていくと、いろいろ変わってきた部分もありますし、その中で各園がそれぞれの規模で工夫されてきたこともおありだと思います。

複数学級であるということは、例えばクラス同士でいろいろ競い合ったりとかいうことも必要ではないかというようなことも含めて議論されていた部分があったと思うのですが、今はそういう学級ごとという形でなくても工夫されているのだろうなというところもあります。

ただ、じゃあそういう競い合うみたいな経験がいらないのかと言ったら、おそらくそうでもないでしょうし、どういう経験が具体的に必要なのかというところも含めて、議論を深めていく必要があると思います。

ぜひ、今、言っていただいたようなポイントを出していただきながら、深めていけたらと思いますが、いかがでしょうか。

【委員 E】

そうですね。私は保育園に勤めていますが、近年、園で特に大事にしていることの一つが「言葉」です。

なぜかと言いますと、本当に数年前と比べて、3歳児の子どもたちが絵本の読み聞かせを聞けないという状況が見られるようになり、「5秒ぐらいしか集中力が続かないのではないか」と感じる場面もあるからです。

では、それは何が原因なのか、一つの環境的な要因もあるのではないかと考えています。私の園では入園時に布おむつを推奨していることをお話ししています。それは単に布おむつが良いということではなく、子どもが生まれた時から持っている生理的な感覚を大切にしたいからです。

子どもが不快を感じて泣き、その気持ちを表現した時に、信頼できる大人がそばに来て、不快だったものを一緒に快へと変えていく。「気持ちよくなったね。じゃあ遊ぼうね」という関わりを通して、乳児期から快・不快のスイッチングを大事にしていこうという考えです。

ただ、それが保育園に通うすべての子どもたちに十分に保障されているのだろうかという思いもあります。子どもの快・不快の気持ちを丁寧に受け止めることを、大人がしっかり理解して実践できているのかということです。

子どもたちは未熟な言葉ながらも、自分の感情に言葉を乗せて伝えようとします。言いたいことは言えるけれど、人の話を聞くことが難しいという姿も見られます。そのため、まずは子どもの気持ちを受け止め、理解しようとする関わりが大切なのではないかと考えています。

そうした子どもの育ちという観点から、「保育園の中でどのような人との関わりが必要か」を考えた時に、信頼できる大人や、自分のことをちゃんと理解してくれる大人の存在が重要だと思います。また、それは大人だけではなく、友達であったり、年齢の垣根を越えた異年齢の友達であったりすることも大切です。

保育園の中でどのような人と関わることが大事かという点では、そのような信頼関係の中で育つ経験を大切にしているところです。

【部会長】

言葉というところも含めて、かなりいろいろ多面的に議論をいただいているかと思います。

他にいかがでしょうか。それぞれの立場からお願いします。

【委員 F】

何人という規模感を示すのはすごく難しいと思うのですが、私自身が担任をしていた時のことを振り返ると、やはり少ない人数のクラスよりも、ある程度の人数がいるクラスの方が子どもたちの関係性はいろいろと動くなという実感があります。

私はもともと保育所に勤めていたので感じるのですが、特に単学級の場合は、1歳児の頃からほぼ同じメンバーで過ごしていくことになります。そうした中で、クラスの人数が少ないとどうしても子ども同士の人間関係が固定化しやすい面があります。

一方で、1クラスに20人程度いると、遊びの内容やその時々の興味関心によって一緒に遊ぶメンバーが変わったり、関係性が動いたりします。そうした経験の中で、子どもたちは相手との関わり方や距離感、自分の思いの伝え方などを学んでいくのだと思います。その意味では、いろいろな友達がいて、ある程度の人数規模があることで得られる経験があるのではないかと感じています。

先ほども「いろいろな意見があることを知ることが大事だ」という話がありましたが、人は大人になる過程でさまざまな人と出会い、「この人とはこう関わる」「この人とは気が合うので仲良くなれる」といった関係を築いていきます。そうしたことは子どもたちの集団生活の中にもあり、その中で学ぶことがたくさんあるのではないかと思います。そう考えると、子どもの育ちにとって、ある程度の規模感は大切なのではないでしょうか。

また、子どもの人数が増えれば職員の人数も増えるため、多様な大人と関わる機会も広がります。例えば、絵が上手な先生とお絵描きをしたい、運動が得意な先生と鬼ごっこをしたいといったように、子ども自身がその時々の興味や気持ちに応じて関わる相手を選ぶことができます。困った時や一緒に遊びたい時に声をかけられる先生が複数いることは、子どもたちの学びや育ちをより豊かなものにする強みになると思います。その点でも、職員についてもある程度の規模があることは大切なのではないかと感じています。

【部会長】

ありがとうございます。いろんな人と出会うということの意味というのは何なのかということなのかもしれないですね。固定的な人と出会うのと、いろんな人と出会うというのは、意味がどう違うのだろうということをちょっと考えていく必要がありそうな気がするのですが。

【委員 D】

すみません。規模に関してですが、教育要領の中でも少しずつ考え方が変わってきていて、例えば非認知能力や子どもの主体性といったものが重視される時代になってきています。また、一人ひとりの子どもをしっかり見ていこうということも強く言われるようになっています。

そうした中で、一定のクラス規模や学年規模、あるいは施設規模があることには意味があるのではないかと感じています。私の園は幼保連携型認定こども園で、0歳から5歳児までの保育に加え、幼稚園型の一時預かりも実施しています。

現在の保育では、集団というものが、以前のように設定保育を行うための集団という位置付けだけではなくなっています。一定の規模がある中で、子どもたちが主体性を発揮し、自分たちでグループをつくったり、共通の興味や関心を持った子どもたちが一定期間一緒に活動したりするような姿が、以前よりも多く見られるようになっています。

こうした経験こそが子どもを育てるのだろうと思いますし、そのような環境が大事だと感じています。規模が小さく、毎日同じ子どもたちが同じメンバーで過ごす環境では、「このグループで一緒にやろう」「何かやってみよう」といった主体的な活動が生まれにくい面もあります。その意味では、もう少し大きな規模があった方がよいのではないかと思います。

ただし、それは昔のように設定保育を行ったり、競争やリレーを通じて子どもや保護者が盛り上がったりすることだけを意味しているわけではありません。むしろ、子どもが関心のあることに取り組み、それを見た別の子どもが興味を示して集まり、「こんな遊びをしない？」と声を掛け合いながらグループを形成していく。そうした経験を共有できる環境が大切なのだと思います。

そして、そのような環境は大規模な園でなければ実現できないということではなく、小規模な園であっても一定の規模が確保されれば実現できるはずです。そうした保育環境が、伊丹市のすべての施設で継続的に保障されることが大切なのではないかと思います。

もう一点申し上げると、3歳児保育を始めて何年か経ちますが、3歳児で単学級としてスタートした園が、その後複数学級になるということはほとんどありません。

また、3歳児の適正配置や適正規模を考える際には、通園のしやすさも非常に重要な視点です。特に0歳児、1歳児、2歳児の家庭にとっては、なおさら大きな課題になります。

そのため、一定の規模を確保するために子どもたちをどこか一か所に集約するという考え方については、子どもが安心して通園できる移送手段まで含めて保障されなければ、実際には難しいと思います。しかし、それを実現することは決して簡単ではありません。

少し踏み込んだ話になるかもしれませんが、規模と子どもの育ちを考える場合には、例えば3歳児を基準に考えたとき、子どもの育ちを支えながら、保護者が安心して通わせることのできる範囲であることが大切だと思います。

先ほど、3キロや9キロという距離の話もありましたが、3歳の子どもが毎日3キロ移動するというのは現実的ではありませんし、自転車であっても3キロは決して近い距離ではありません。

そうしたことも含めて、伊丹市の交通事情や地域の実情を踏まえながら議論していくことが必要なのではないかと感じています。

【部会長】

ありがとうございます。規模については、やはり良いバランスの落としどころを見つけていく必要があるというのは、本当にそのとおりだと思います。

先ほど、グループがいろいろ組み替えられたり、関係性が動いたりするというお話がありましたが、委員の皆様のお話を聞きながら、関係性が動くことには子どもの育ちにとってどのようなプラスの意味があるのだろうかと考えていました。

おそらく、関係性が固定されていると、「きっとこうなるよね」「そうだよね」といった反応が返ってきて、同じパターンのやり取りで過ごすことができるのだと思います。しかし、その同じパターンではないことが起こった時に、新しい学びがあったり、新しい人や出来事と出会ったり、時には困ったりすることもあります。そうした経験を乗り越えていく過程の中で、子どもは育っていく部分があるのではないかと思います。

一方で、そうした変化をとても得意とするお子さんもいれば、関係性が変わること自体が苦手なお子さんもおられると思います。ただ、そのようなお子さんにとっても、関係性が動くことの意味が全くないわけではないのだろうなと思いながらお話を聞いていました。

そこで委員にお聞きしたいのですが、ご専門の立場から見て、支援の必要なお子さんの場合、普段とは違う関係性や新しい出会いに対して苦手さを感じることもあると思います。そのようなお子さんにとって、どの程度の規模感が望ましいのか、また、人との新たな出会いや関係性の広がりがどのようにあるとよいとお考えなのか、そのあたりのお考えをお聞かせいただければと思います。

【委員 G】

難しいところですが、やはり子どもの特性によって大きく違ってくると思います。

例えば、一見すると社会性があるように見える子でも、実際には人そのものへの興味が薄く、誰のところにでも行けるというタイプの子もいます。そうした場合、それを本当に社会性があると評価できるのかというと、必ずしもそうではありません。

周りとは関われるので、集団の中でも楽しそうに見えます。しかし、先生の意図を理解して集団活動に参加できているかというと、実はそうではなく、ただ楽しくてワクワクして「きゃー」と言いながら過ごしているだけということもあります。

では、その子に学びを保障しようと考えた時に、何人くらいの集団が適切なのかと言われると、私たちが療育で実践しているくらいの人数規模なのだろうと思います。

私のところでは定員30人で運営していますが、その30人を毎日異なるグループに分け、5～6 グループほど作っています。その中で意図的に組み合わせを変えるなどの工夫をしながら、トレーニングというわけではありませんが、さまざまな人と関わる経験ができるようにしています。

また、「今日はこの設定で、この目標を達成するためにグループを作ろう」という場合には、その目標をどの子に経験してほしいのかを考えながらグループ編成を行っています。

そうした中で、3歳以上の子どもについては、3歳児から年長児までを含めて6～7人程度のグループを作ることが多くなっています。一方、午前中に来ている小さい子どもたちの場合は、1対1で関わる必要があるケースもあります。

そのため、こども園や保育所、幼稚園では加配の先生が配置されていると思いますが、その支援の在り方も子どもによって異なります。1人の支援者で3人程度を見られるお子さんもいれば、1対1での支援が必要なお子さんもいます。さらに、その上で担任の先生も関わることになります。

そう考えると、どのような関わり方をするのか、どのような配置にするのかということは、本当に難しい課題だと思います。

現状では、支援が必要な子どもに対して何人配置するかという基準で考えざるを得ない場面も多く、人員不足もあって非常に大変な状況になっています。

しかし実際には、子どもの特性に応じて必要なサポートの形や配置は大きく異なります。そのため、適正規模の議論とは別に、支援を必要とする子どもたちに対する支援体制や人員配置については、個別にしっかり検討していく必要があるのではないかと思います。

【部会長】

そうですね。ありがとうございます。

今、加配の話も出していただきましたが、集団の中で、特に公立園には特別支援の先導的な役割を担うという側面があります。そのことを考えると、単純に「集団が大きければよい」というわけではないのかもしれません。

一方で、やはりさまざまな人と出会う機会をどこかで保障していくことは必要だと思います。また、加配の先生の関わり方についても、園によって考え方が異なる場合があると思います。

例えば、1対1で常に付き添う場合もありますが、あえて先生が少し離れ、その子自身が周囲の子どもとの関係を築いていくことを大切にする考え方もあります。

そのあたりについて、実際には園の中でどのように意識されているのでしょうか。

【委員 C】

本当に一人ひとりの子どもに合わせて、必要なところに必要な支えや支援を行うようにしています。

そのため、1対1の配置であっても常にべったりと関わるとは限りませんし、担任の先生がクラスの中で十分対応できるのであれば、そのような配慮の仕方をすることもあります。

基本的には、その子に合わせた支援を行うということだと思います。

ただ、一番大切なのは安全面ですので、その点については特に配慮しています。

【部会長】

ありがとうございます。よく分かりました。やはり子どもによって支援の形が大きく異なるのは当然のことだと思います。

逆に言うと、周りの子どもたちがその子との関係をつくることにも大きな意味があります。そのことを考えると、あえて先生が1対1で関わり過ぎないようにすることも重要だと思いますが、とても難しいことでもありますよね。

そのあたりはかなり意識されているのでしょうか。

【委員 E】

それはもう本当に、こちらが計画していたとしても、朝登園してきた様子が昨日と全然違う場合もあります。

あと午前中調子良かったのに、「うわ、午後からもう全然やな」ということもありますし。

だからもうその時で切り替えないといけないですし、季節によっても、その子自身の成長発達であったり、あとはご家庭の環境要因であったり、いろんなことがありますので、本当にそこは先生たちの連携ですよね。

「どうしようか」「こうしようか」と話し合いながら、協力しながらするしかないという感じです。

【部会長】

なるほど。ありがとうございます。まさにそのとおりですね。

これは次の議論にもつながることだと思いますが、職員同士の連携や人員配置の問題は非常に大きなポイントなのだと改めて感じました。

ここまでの「子どもの育ち」に関する議論では、協同性や社会性、集団の規模といった話がありましたが、一つ大きな視点として、さまざまな人と出会うことで、これまでとは違う関わり方や経験に触れ、世界を広げていけるような集団規模が大切なのではないかということが見えてきたように思います。

例えば、先ほどお話にあったような「目的に応じたグループをつくる」「興味や関心に応じて遊びを展開する」といったことも、とても重要な要素ではないかと思います。

また、支援を必要とする子どもが増えている現状を考えると、大きな集団であればよいというわけでもありませんし、逆に小さければよいということでもありません。そのあたりの適正規模を探っていく必要があります。

さらに、通園できる範囲の問題もあります。さまざまな要素を踏まえながら、現実的な落としどころを見つけていくことが求められるのだと思います。

後の議論にも関わる内容だと思いますので、ありがとうございました。

ところで、園の中で意図的に設定する人間関係というものもあると思いますし、異年齢との関わりもありますが、地域の中で子どもたちが自分たちだけで遊ぶ集団というのは、今はあまり見られなくなっているのでしょうか。

小学校に上がると、子どもたちは日常的にどのようにつながっているのだろうと思うのですが。

私が幼稚園で働いていた頃でさえ、「今日遊びに行くね」という感覚ではありませんでした。

もう 20 年以上前の話ですが、「今日遊びに行っていい？」と事前に約束を取るような状況でした。

必ず保護者がいる場所で遊んでいましたし、大人の目を盗んで遊ぶとか、大人の目の届かないところで何かをするという経験は、以前よりかなり少なくなっていると思います。

今の子どもたちは、基本的に大人が見守っている環境の中で遊んでいることが多いと思います。

【委員 F】

伊丹市の地域環境や住宅環境の現状から地域の中で子どもだけで遊ぶことは可能でしょうか。

【委員 G】

私の地域は、一軒家が多いエリアとマンションのエリアが結構ばらばらにあって。

会社の近くはマンション系が多いので、マンションの子たちと遊んでいるみたいな、その近くの子と行ってるとか、マンション広場で遊んでるとか。

一軒家同士になると、結構習い事で会った子と、習い事が終わった後に遊ぶとか、習い事の合間に遊んでるという感じで、私の子どもたちとか遊んでます。

【委員 B】

私の地域はマンションが少なく、団地がある程度です。

団地の近くの公園であれば、その団地の子ども同士で遊んでいることがあります。

小学生になると、学校で約束して遊ぶことも多いと思いますが、幼稚園児の場合はどうしても保護者ありきの動きになります。

子どもが歩ける距離や、その日の体力、残っている余力などを保護者が考えながら動いているというのが実情です。友達の家に行くにしても、まず保護者同士で連絡を取り合い、習い事の予定なども確認した上で遊ぶことになります。

ありがたいことに園庭開放がありますので、そのまま園庭で安全に遊ぶこともできますし、「お弁当の後にまた会おうね」といった約束をすることもあります。

また、地域には月2回子ども食堂があり、その機会に保護者同士が約束をして集まります。子どもたちは食堂が始まるまで遊び、食事の後も公園で遊んでから帰るというような過ごし方をしています。

そのほか、土日に習い事がある子どもたちは、習い事を通じて地域を越えたつながりを持つこともあります。

このように、子ども同士だけで約束して遊ぶというのは、現在ではなかなか難しい状況だと感じています。

私自身は三田市出身なのですが、三田ではマンションの中に必ず公園があり、周囲の大人が自然に見守っている環境がありました。そのため、年長児くらいになると保護者が付き添わずに遊ぶこともありました。

しかし、こちらは一戸建てが多く、交通量の多い道路もあるため、子どもたちだけで公園に行かせるということは簡単にはできません。

そのため、どうしても保護者同士が事前に約束をしてから遊ぶという形になっているのが現状だと思います。

【委員 C】

つい最近のことですが、うちの園の5歳児が一人で近くの公園に遊びに行っていて、警察に保護されるという出来事がありました。これが 20 年前だったら警察も声を掛けなかったのではないか、あるいは 10 年前ならどうだったのだろうかと思います。

その子は、一人で家を出て、公園で友達と遊びたい、誰かいたら一緒に遊ぼうと思って公園へ行っていたのですが、今は一人で外に出て危ない道を渡ることや、まだ就学前の子どもが一人で行動することについて、とても慎重に見られる時代になっていて、結果として警察に保護されるような状況になったのだと感じました。

マンションの敷地内のような環境であれば、周囲の大人に見守られながら、もう少し安心して過ごせるのかもしれないとも思いました。

【委員 F】

なるほど。そう考えると、異年齢の子ども同士が関わる経験というのは、今では園の中で得ることが中心になっているのかもしれませんね。

【部会長】

そうですね。何かセッティングしないと、大人がいないとなかなか難しいというふうになっているんでしょうね。

そういう意味では、やっぱり幼児教育施設の必要性というのが高いし、子ども食堂と言っていただきましたけれども、そういうことがないとなかなかつながれないというのが現状なのかなと思います。

ありがとうございます。

今までの議論でお気づきの点がありましたら、お聞かせいただけたらと思います。

【委員 H】

私が申し上げるのも少し恐縮ですが、幼児教育というのは、子どもが親や保護者以外の、いわば他者と初めて本格的に関わる機会だと私は考えています。

そして、幼児教育施設や園というのは、社会の仕組みとして整えられた場の中で、子どもが初めて親や保護者以外の大人や子どもと出会い、関わる場所です。

そう考えると、今日議論されている内容も、まさにその「人との関わり」が中心になっているのだろうと思います。

少し先走った話になるかもしれませんが、以前の答申を改めて見返してみると、それからかなりの年月が経過しており、状況も大きく変化しています。その中で感じるのは、やはり単純に数だけを議論することにはあまり意味がないのではないかということです。

今日のお話を聞きながら、私自身も大変勉強になり、多くのことをメモさせていただきました。今後は、今日のような内容面の議論をさらに深めながら、それを答申へとつなげていくことになるのではないかと思っています。

【部会長】

ありがとうございます。本当に議論の要点を的確に整理していただいたと思います。

やはり大切なのは、子どもたちにどのような経験が必要なのかということですよね。

人数そのものの問題というよりも、子どもの育ちに必要な経験とは何か、そしてその経験を支える集団とはどのようなものなのか。その集団が実際に成立し得るのかどうかという視点が重要なのだと思います。
本日いただいたご意見を、今後の答申につなげていければと思います。

さて、この議論は長くなりましたので、次に「質の向上」というテーマに移りたいと思います。
伊丹市では、幼児教育ビジョンをはじめとして、長年にわたり教育・保育の質の向上に取り組んできました。今後もその質を維持し、さらに高めていくためにはどのような条件が必要なのかを考えていきたいと思います。
特に論点の一つとして挙げられている「保育者同士の学び」についてです。
保育者同士が学び合うとは具体的にどういうことなのか。先ほども連携のお話がありましたが、日頃感じておられることがあればお聞かせいただきたいと思います。
現場からの視点もあれば、養成の立場からのご意見もあるかと思います。いかがでしょうか。

【委員 F】
卒業生が大学に戻ってきて、今の仕事の状況について話してくれることがあるのですが、その中でよく聞くのは、複数担任の中で先輩の姿を見ながら仕事ができる方が学びやすいということです。
幼稚園では一人でクラスを任されることが多いのですが、その場合、自分も保育をしているため、隣のクラスの先生がどのような保育をしているのかを見ることができません。
自分なりに工夫しながらやってみるものの、うまくいかず悩んでいるという話はよく聞きます。
私自身も保育者として働いていた頃を振り返ると、さまざまな先生方を見ながら、「この先生のこういうところを真似したい」「この関わり方はいいな」と学び、自分ならどうするかを考えてきました。
そういう意味では、多くの先輩に触れたり、いろいろな保育実践を見たりできる環境はとても大切だと思います。

【部会長】
私も幼稚園教員になった1年目に、いきなり4歳児クラスを27人ほど任された経験があります。
学生時代にはいろいろな保育現場で実習や経験を積んでいたつもりでしたが、実際に園に入ると、これまで自分が学んできたやり方と園の方針が全然違っていて、当時の園長先生から本当にたくさん指導を受けました。
今振り返ると、ずいぶん独りよがりな保育をしていたのだろうと思います。
ただ、実際には他の先生方がどのように保育をされているかを見る機会が少なく、そのあたりは難しいと感じていました。
皆さんの園ではどのように工夫されているのでしょうか。

【委員 A】
幼稚園ですので、以前と比べるとにじいろの先生や子育て支援の先生など、さまざまな先生が関わるようになり、多くの目で子どもたちを見られる環境にはなっています。
ただ、それぞれに役割があるため、同じ立場で一緒に保育をする機会はそれほど多くないとも感じています。
一方で、先ほどお話にあった研究や先導的な役割という意味もありますが、園内研修は学期に2回実施していますし、月1回程度の研修も行っています。
それだけではなく、日常の中で隣の先生が保育室をのぞきに行き、「これいいね」とか、「今、子どもたちが興味を持っているから、一緒に広げてみない？」といった会話が自然にできるようにしています。
時には担任同士で役割を交代することもありますし、「担任一人で全部抱え込まなければならない」という状況にならないようにしています。
「助けてください」「分からないです」「先生、歌が得意だから歌を作ってください」「絵が得意だから一緒に作ってください」というような関係の中で、みんなで子どもを見ていけるような取り組みを行っています。

【部会長】

なるほど。保育を見学して学ぶというよりは、保育後に話し合ったり学び合ったりすることも大事なのですね。

幼稚園は比較的会議が密に行われる印象がありますが、それもそうした学び合いのために重要ということなのでしょうか。

【委員 A】

そうですね。以前は会議時間が長過ぎることも課題でしたので、短くしていこうという工夫もしています。

例えば、付箋を使って子どもの良いところを書き出したり、担任だけではなく他の先生も子どもの良さに気付けるようにしたり、回覧ノートに一言ずつ書いたりしています。

もちろん、きちんと座って行う会議もありますが、それだけではなく、さまざまな方法を組み合わせながら、先生たちが負担を感じ過ぎず、みんなで子どもの良さを見つけられるよう工夫しています。

【部会長】

そうですよね。やり方の工夫がそれぞれにある感じですよね。

【委員 C】

私たちも幼児教育センターの研修に参加し、理論を学び、それを実践し、振り返るという流れを大切にしています。また、園内研修や会議を通して職員同士の連携も図っています。

基本的な考え方としては、「チームで考えよう」ということをよく話しています。

担任の人数が少ない中で悩むこともありますし、子どもの見方も一人ひとり違います。だからこそ、多面的・多角的に子どもを捉えながら、明日の保育をどうするかにつなげています。

会議の時間が十分に取れないこともありますが、そういう時は立ち話でも、通りすがりでも構わないので、子どもの情報交換をしたり、先輩からアドバイスをもらったりしています。

そうしたやり取りは日常的に行われていると思います。

【部会長】

ありがとうございます。やはりチームとしてどう育っていくのか、職員集団としての力をどう高めていくのかは、とても大事なことだと思います

【委員 D】

私の園は規模が大きいため、保育者同士の交流や、経験豊かな保育者と若手保育者とのコミュニケーションは比較的保障されています。

むしろ一定規模の職員がいる組織では、人間関係やハラスメントが起こらない環境づくりの方が課題になることもあります。そのため、マネジメントとしてはそうした部分に力を入れています。

また、昔の幼稚園は職員の大半が担任で、熱があっても休めないという使命感の中で働く時代でした。

しかし現在は一定の人員配置があるため、体調が悪い状態で無理に子どもと向き合うべきではないという考え方が当たり前になってきています。これも質の向上につながる大切な要素だと思います。

さらに近年は、働く環境の改善が非常に重要になっています。

長時間勤務を減らし、できるだけ勤務時間内に仕事が終わる仕組みを作ることが、結果として保育や教育の質を高めることにつながります。

新しいことに挑戦しようとすると仕事時間が増えてしまうという状況では、誰も挑戦できなくなってしまいます。そのためには、やはりある程度の人員が必要です。

私たちの認定こども園では、担任は全職員の3～4割程度で、残りは特別支援補助員や一時預かり担当などを担っています。ただ、その職員たちも担任経験が豊富で、担任が体調を崩した時にはすぐに代わることができます。保護者も安心できますし、そのような仕組みの中で質の向上を図っています。

また最近感じるのは、研修のあり方です。研修時間の確保が求められていますが、オンライン研修だけでは一方向的な学びになりがちです。

例えば60時間の研修が必要なら、そのうち30時間は対面研修にするといった工夫があっても良いのではないかと思います。

実際、職員は対面研修に参加するととても刺激を受け、生き生きとした表情で帰ってきます。

特に小規模園では日々の業務に追われることも多いため、市主催の研修を参加しやすい時間帯に実施したり、短時間でも受講できる仕組みを整えたりすることが、質の向上につながるのではないかと思います。

【部会長】

ありがとうございます。実際に研修に出ている間、子どもを誰が見るのかという問題があります。そのため、代わりに保育にあたる人をどのように確保するのかといったことは、制度として整えていく必要があるのではないかという議論も出ています。

そうしたことを考えると、やはり一定規模の職員集団は必要なのだろうと思います。

大学でも同じですが、学生数の減少に伴って定員を減らすと教員数も少なくなります。そうなると、一人ひとりの教員に割り振られる仕事量が増え、一つの仕事に集中することが難しくなってきます。

先ほどお話しいただいたように、あるテーマにしっかり集中して質を高めていくことが難しくなり、結果として全体が薄くなってしまう危険性があります。そこをどう乗り越えていくのかは、大きなポイントになるのではないかと思います。

いかがでしょうか。

【委員 E】

はい、まさにそのとおりだと思います。

私の園ではフロア保育を行っていて、0歳から2歳児までは同じフロアで、部屋を変えることなく保育しています。そのため、保育者が孤立することのない環境になっています。

3・4・5歳児についてもフロア保育を行っているので、一人だけで保育をする状況にはなりません。常に他の先生方の保育の様子を見たり聞いたりできる環境の中で仕事をしています。

ただ、その中でも、なかなか発信できない先生がどのような不安を抱えているのかということがありますし、職員同士の人間関係やハラスメントの問題などもあります。どこまで支援し、育てていくことが大切なのかという点については、それぞれが悩みながら取り組んでいると思います。

そのため、一人ひとりに細やかに声をかけながら支えていくことが大切になります。

先ほどもお話がありましたが、本当にチームで対応していかないと難しい状況です。人員も時間もぎりぎりで、職員会議の時間すら十分に確保できないこともあります。

だからこそ、お互いにカバーし合いながら、チーム力で取り組んでいるというのが現状です。

【部会長】

いかがですか。今までの議論。逆に保護者の立場から、やっぱり先生たちのチームワークって見えてますでしょうか。なかなか答えにくいことだとは思うのですが。

【委員 B】

私はすごく感じています。

私の子どもは末っ子なので、これまで年上のきょうだいとの関わりが中心でしたが、年中になって初めて年下の子のお世話をするような経験をしています。

園では、年長・年中・年少と担任の先生はそれぞれ違いますが、どの先生も園全体の子どもたちを見てくださっていると感じます。どの先生も子どもの名前が自然に出てきますし、4月の時点では保護者と子どもの顔が一致していなかったとしても、5月、6月になる頃には先生方同士でしっかり共有されていることが分かります。

そのため、担任の先生だけではなく、「今日は小鳥組のこの子と手をつないでいましたよ」とか、「今日は年上のお兄ちゃん、お姉ちゃんと一緒に遊んでいましたよ」とか、「その子と仲がいいですよ」といった話を、さまざまな先生から聞くことができます。

そうした垣根を越えた関わりが、まさにチーム力なのだろうと思います。

また、保護者同士についても、先生方が橋渡しをしてくださることで、保護者同士に関係が生まれています。

休園期間が長かった時期もありましたが、そのような状況でも居心地の良い環境をつくってくださっていると感じています。

私自身、12歳、9歳、4歳の子どもを見るだけでも大変だと感じています。それなのに先生方は何十人もの子どもたちをクラスで見て、園全体では100人近い子どもたちを支えてくださっています。

さらに、それをチームとして取り組んでおられることには、本当に感謝しかありません。

【部会長】

ありがとうございます。ご自身も現場でお仕事をされている立場ですので、何か感じられることもあるかと思いますが、いかがでしょうか。

【委員 G】

私は少し違う立場になりますが、保育所とも関わりがあります。

最近は保育現場の先生方から、「来てほしい」「教えてほしい」と言われることが増えてきました。

私の事業所には保育士や教員だけでなく、ST（言語聴覚士）、OT（作業療法士）、PT（理学療法士）など、さまざまな専門職がいます。そのため、専門的な視点からのアドバイスを求められることが多くなっています。

本来は保護者からの依頼があって訪問するのですが、先生方から相談があり、「保護者に説明した上で来てもらおう」という形になることも増えています。

私たちはその子への支援を目的に関わるのですが、先生方はそれを見ながら、「これは他の子にも活かせるね」と学んでくださっています。そうした姿を見ると、とてもやりがいを感じます。

また、私たち自身も多職種で働いているので、日々学びがあります。

例えば、「なぜこの発達に遅れが見られるのだろう」と尋ねると、隣にいる言語聴覚士がすぐに専門的な視点から教えてくれます。子どもの発達を総合的に理解できることは本当に大きいと思いますし、それによって課題や背景が分かれば、早い段階で適切な支援につなげることができます。

そうした知識や視点を園の先生方とも共有できますし、今は小学校とも関わっているので、幼保小連携の架け橋にもなれたらと考えています。

療育事業所も、一緒に子どもを支える仲間として関われればと思っています。

【部会長】

ありがとうございます。今のお話を聞きながら、「チーム学校」という考え方に近いのかなと思いました。

現在、国では教員養成課程の見直しが進められていますが、その中でも、それぞれが専門性や強みを持ちながら協働していくことが重視されています。

保護者支援が得意な先生、特別支援に強い先生、環境教育に強い先生など、それぞれの専門性を生かし合う組織づくりが求められているのだと思います。

幼児教育施設においても、今後はそうした視点がますます重要になっていくのではないでしょうか。

園の中だけでは難しい場合には、他機関との連携も含めて考えていく必要があります。

その意味では、多様な専門性を持った職員体制をどう整えるか、チームとしてどう機能させるか、さらに研修を受けやすい環境をどうつくるかといったことが重要になってくるのだと思います

【委員 H】

十分勉強できているわけではありませんが、私が学校の職員体制について考える中で思うのは、職員集団は同質的でない方がよいということです。ベテランばかりいてもよくないし、経験の浅い職員ばかりでもよくありません。

また、質の向上というのは、先輩から学ぶだけでなく、後輩を育てることによって先輩自身も学ぶという側面があります。園長が新任職員を指導する中で、実は園長自身も多くを学んでいるということがあるわけです。

そういう意味では、いろいろな人が集まり、お互いに学び合える環境が大切だと思います。そして、そのためには一定の人数も必要なのではないでしょうか。

特に小規模な園や学校では、そうした多様性を確保することが難しい面があります。異なる経験や専門性を持った人たちが集まり、お互いに学びながら成長していくことを考えると、一定規模があることには意味があると思います。

私自身はどうしても答申のことを考えてしまうのですが、今後は、「職員が学び合うこと」「職員が働く環境」「幼児教育そのもの」、この三つの観点から、適正規模や適正配置を考えていく必要があるのではないかと思います。

前回の答申を読み返した時にも、そのあたりが十分に見えにくかったように感じました。

人数を明確に示すことは難しいかもしれませんが、一定の方向性が見えてくれば、市民の皆さんにも納得していただける答申につながるのではないかと思います。

【部会長】

ありがとうございます。非常に重要な視点をご提示いただいたと思います。

特に、「同質的な集団ではなく、多様な職員集団であることが大切だ」という点は、大きな示唆をいただきました。

また最後に整理していただいた、「職員が学び合うこと」「職員が働くこと」「幼児教育そのもの」という三つの観点は、これからの議論の方向性を考える上でも重要な視点になると思います。

やはり、職員集団の在り方と教育・保育の質の向上は強く結びついていることを改めて感じました。

ありがとうございます。

それでは、三つ目の視点である「公立施設の役割」について考えていきたいと思います。

特別支援やインクルーシブ教育、幼保小接続、子育て支援、拠点園機能、地域連携など、さまざまな役割があると思います。

その中で、適正規模・適正配置に関わる視点についてご意見をいただければと思います。

特別支援についてはこれまでにも重要な役割として議論がありましたが、「先導的な役割を担う」という言葉が具体的にどういう意味を持つのか、またどのような仕組みが必要なのかという点も含めて、お聞かせいただければと思います。

【委員 F】

特別支援という点で言うと、先ほどの集団規模の話とも関わるのですが、他市の公立幼稚園の状況を見ていると、1号認定の子どもが減少し、それに伴って園児数も減ってきています。

その一方で、特別支援を必要とする子どもは増えており、園によっては特別な支援を必要とする子どもが集団の大部分を占めるような状況も見られます。

しかし、本来はさまざまな子どもたちとの関わりや経験の中で、支援を必要とする子どもたちも育っていくものだと思います。その意味では、やはり一定の集団規模があってこそ、特別支援における先導的な役割も果たせるのではないかと感じています。

また、子育て支援については、主に0歳から2歳頃までの未就園児やその保護者が対象になることが多いと思います。そう考えると、0歳児保育の経験を持つ職員がいることは大きな強みになるのではないでしょうか。

さらに、拠点園としての役割を考えると、地域全体をバランスよくカバーできることが公立施設の意義だと思います。

市全体としてどのような教育・保育を進めていくのかを考える際に、特定の地域の保育のみを担っているという状態では難しいと思います。市職員としての役割を果たすためにも、市全体を視野に入れて状況を捉えられる体制は大切なのではないかと考えています。

【部会長】

ありがとうございます。確かに、市の職員として市全体を見ながら取り組むという視点は、公立施設の大きな役割の一つなのだろうと思います。

また、支援の必要な子どもの割合が高くなっているというお話がありましたが、その一方で、その子どもたちと一緒に育つ子どもたちにも、豊かな育ちがあるのではないかと思います。

例えば、外国にルーツを持つ子どもが半数近く在籍している園で発達検査に関する研究をされている先生方のチームがあるのですが、研究のために日本ルーツの子どもたちのデータも取られています。その中で、状況を読み取ったり、言葉によらないコミュニケーションを行ったりする力、相手の意図を理解する力については、その園の日本ルーツの子どもたちの方が高い傾向が見られたそうです。

それは、さまざまな背景を持つ子どもたちと一緒に育っているからこそ、そうした力が育っているのではないかと思いますし、それがその環境の強みなのだろうと感じています。

それぞれの園には、それぞれの役割の中で培われた強みがありますし、公立園ならではの強みというものもあるのかもしれません。それが、特別支援における「先導的な役割」とも関係してくるのではないかと思います。

そこでお聞きしたいのですが、民間園と公立園との連携は、現在どのような形で行われているのでしょうか。

【委員 C】

にじいろ保育を実施しています。私立園でもにじいろ保育を実施している園があり、事業の一環として取り組んでいます。担当者は年に4～5回集まり、意見交換や研修などを行っています。

また、日々の子どもへの具体的な関わり方や支援の方法についても情報交換をしています。

例えば、私の園と民間園の子どもたちの中に似た特性のお子さんがいる場合、「どのように関わっているのか」「どのような手立てを取っているのか」といったことを共有しながら話し合っています。

これが先導的な役割と言えるかどうかは分かりませんが、担当者同士が集まり、継続的に意見交換を行っています。

また、部会長がおっしゃったように、「共に育ち合う」という考え方はにじいろ保育の中心的な理念の一つです。

支援が必要な子どもだけではなく、その周りの子どもたちも一緒に育つ。その「共に育ち合う」という視点を常に大切にしながら保育に取り組んでいます。

【委員 E】

そのとおりだと思います。私の園でもにじいろ保育を実施しており、にじいろ保育担当者会議には参加しています。おぎの幼稚園が中心となって進めてくださっています。

また、公開保育も実施していただいているので参加させてもらっています。保育園とは異なる幼稚園ならではの豊かな自然環境や保育環境などについて学ぶ機会になっています。

さらに、「架け橋期」の取組についても中心となって進めていただいているので、大変勉強になりますし、連携もスムーズに行えていると感じています。

【部会長】

ありがとうございます。そのあたりの学び合いであったりという機会は、地域全体という発想で動いておられるのか、それとも先ほど拠点園を軸に6ブロックというお話もありましたけれども、地域ごとで動いている部分というのが結構大きいのでしょうか。

【委員 C】

両方ですね。 両輪というか。

拠点園でももちろん中心になって、にじいろ広場というのも開催していますし、両方ですかね。

【部会長】

なるほど。そうすると、地域ごとの拠点園を軸にしたネットワークも重要な役割を果たしているということですね。

市全体の取組だけでなく、地域ごとのつながりも大切にされている。

これは次の論点である「地域性」にも関わってくることだと思います。

先ほども地域バランスのお話がありましたが、小学校との連携についても同じことが言えるのではないかと思います。

私自身は民間園で働いていましたので、卒園児の進学先が20校以上あり、特定の小学校との連携が難しい状況でした。

四半世紀ほど前になりますが、当時は幼小連携の枠組みに入りにくく、支援の必要な子どもの引継ぎだけでつながることが多かったように思います。

現在は、公私を問わず幼小連携は進めやすくなっているのでしょうか。

【委員 E】

そうですね。10年、20年前と比べると、今は小学校側も「ぜひ来てください」と言ってくださるので、連絡を取れば交流や連携はしやすくなっています。

また、支援が必要な子どもについては、就学に向けた教育相談も充実してきています。

そうした意味でも、小学校との連携は以前よりかなり進めやすくなっていると思います。

【委員 C】

ここ3年ほどは特に「架け橋」という取組が進められていて、拠点園を中心に、小学校との連携はかなり進んできていると感じています。お互いに歩み寄りながら、着実に関係ができてきていると思います。

【部会長】

幼小接続ということを考えると、今後は接続カリキュラムの作成や運用も重要になってくると思います。そのあたりについて、市としてはどのような状況なのでしょうか。

【委員 C】

幼児教育センターが中心となって、作成は済んでいます。今、実践しているところです。

【部会長】

なるほど。そうなった時に、そのあたりはやっぱり公立園の果たしている役割というのはどういうことになるんですかね。

【委員 C】

接続カリキュラムの作成や実践という面では、拠点園が中心となって小学校へ働きかけています。

また、ブロック内の公立園・私立園、小規模保育事業所などにも声をかけ、一緒に子どもの姿をもとに情報交換をしています。

拠点園からは、小学校に対しても、ブロック内の各施設に対しても積極的に発信しながら取組を進めています。

現状としてはそのような形です。

【部会長】

今のお話を聞いていると、まさに公立園が役割を果たしているということだと思います。

機会や場をつくる役割ですね。

【委員 E】

逆に言うと、それがなければバラバラになってしまうと思います。

そうした場をつくっていただいていることは、本当に大きな意味があると感じています。

【部会長】

ありがとうございます。拠点園が地域ごとのネットワークを支え、そのブロック内の園が集まり、つながる仕組みをつくっているという意味で、公立施設は非常に大きな役割を果たしてきたのだと思います。

ここでは公立施設の役割と地域性をあわせて議論していますが、この点について何か大切な視点があればお聞かせいただきたいと思います。

先ほど通園距離の話もありましたが、そのあたりも大きな要素だと思います。

【委員 D】

公立施設の役割を考える上で、以前と大きく変わってきているのは保護者の状況だと思います。

特に就労状況の変化は大きく、支援が必要な子どもだけでなく、就労家庭をどう小学校につないでいくかという課題の比重も高くなっています。

公立幼稚園でも預かり保育を実施するようになってきましたが、今は就労家庭が多数派になっている時代です。そうした中で、小学校への接続を考えると、拠点園の役割は非常に大きいと思います。

少し踏み込んだ意見になるかもしれませんが、これからは保育所が拠点園の役割を担うということも考えられる時代になってきているのではないかという気もしています。

【部会長】

なるほど。ありがとうございます。先ほども1号認定と2号認定の人数や施設数の話がありましたが、社会状況が変わっている中で重要な検討課題になりそうですね。

また、伊丹らしい適正配置とは何かということも考えていく必要があると思います。

交通事情や移動のしやすさ、地域ごとの特性、地理的条件なども関係してくるでしょうし、支援が必要な子どもがいる家庭では移動そのものが負担になる場合もあります。

現在、伊丹市では6ブロック体制になっていますが、この区分は実際に生活していたり働いたりしている皆さんから見て妥当な規模なのでしょうか。

【委員 B】

3歳児を連れて歩くことを考えると、徒歩15分くらいが子どもにとって頑張れる距離かなと思います。20分になると、何かご褒美がないとなかなか厳しいかもしれません。

保護者にとっても時間や体力の負担があります。年長児ならもう少し頑張れるかもしれませんが、徒歩圏内をどう考えるか、自転車利用を含めるのか、あるいは就労家庭が増える中で車の利用をどう考えるのかということも関係してくると思います。

また、勤務先に近い施設を利用できるのかどうかということも気になります。実際、荻野地域では園が一つ閉園になったことで、一番遠い家庭では自転車でも15分程度かかるようになりました。

選択肢が広がった面もありますが、その分、通園負担という課題も出てきていると感じています

【部会長】

ありがとうございます。今の距離感が、何とか成り立つかどうかのぎりぎりのラインということでしょうか。

【委員 C】

そうですね。15分と20分でも違いますもんね。

子どもは「もうちょっとやから頑張ろう」と言っても、「もう頑張った」と言いますからね。

【部会長】

なるほど。距離や拠点園の配置を考える上では、そのあたりも重要ですね。

距離的なこととか、拠点園ということで考えた時に、そのブロックの中にある園の数はどれくらいになるのでしょうか。地域によってかなり違うと思うのですが。

【事務局】

最後のページに付けております資料になりますが、私立保育園を除く施設については掲載させていただいております。私立保育園に関しては数十か所ありますので、それを含めるとかなり細かい図になるかなというところで、今回は載せておりません。

【部会長】

やはり、ここに載っているだけでも、一つの拠点のところの園の数というのはそれなりにある感じなのですよね。

【事務局】

そうですね。今そこの図にあるプラス保育園があって、どのブロックにも複数ありますので。

【部会長】

このネットワークも含めて考えていくことが重要だと思いますし、ブロック内で十分な議論や連携ができる規模という視点も必要になると思います。また継続して議論していければと思います。

それでは最後の視点である五つ目の「持続可能性」について考えていきたいと思います。

少子化が進む中、今日議論してきた教育環境や公立施設の役割をどのように維持していくのか。質の高い幼児教育を継続するために何が必要なのか、将来を見据えてご意見をいただければと思います。

【委員 F】

保護者ニーズという面では、1号認定の子どもが減少していく中で、「この園に通わせたい」と思っても選べない家庭が増えていく可能性があるのではないかと思います。

また、この資料を見ると、こども園は比較的希望者が多く、複数学級になっているところもあります。

これは地域性なのか、施設形態によるものなのか分かりませんが、保護者からはどのように見えているのか気になるところです。

【委員 B】

一つ気になっているのが、この待機児童の方が、1号として応募しているのか、2号として応募して待機になっているのかによって状況が変わるのではないかという点です。

1号で応募しているものの、将来的には2号になりたいと考えて申し込まれているケースもあるのかなと思っています。そうなると、1号の定員や2号の定員の考え方にも影響してくるのではないかというのが質問としてあります。

また、保護者ニーズという点でいうと、こども園の給食は保護者にとって魅力的な部分だと思います。

給食の制度がどのように違うのかは詳しく分からないのですが、幼稚園の場合は週3日、お弁当を保護者が作っています。残りの2日間は午前中保育です。

そう考えると、預かり保育を利用しながら仕事をしている状態で、2号認定まではいかないものの、1号認定で就労されている方にとっては、給食のある環境の方がやはり魅力的に映るのではないかと思います。

そういった部分で選択は変わってくるのかなと感じています。

ただ、全てをこども園にした場合に本当に利用者が分散されるのかについては、地域性もあると思うので何とも言えません。

豊中市のような形がよいのか、それとも芦屋市のように3園だけにする形がよいのか、私自身判断がつかないのですが、その点は気になっています。

一方で、こども園になったとしても幼保小連携を進めていくとのことでした。

実際に長女の時には、サポートファイルが小学校へ引き継がれましたので、そこでの取りこぼしというか、連携が途切れない仕組みになっています。やっていること自体は同じであり、その部分が変わらないのであれば、保護者としては安心できる要素の一つだと思います。

また、今後は就労する保護者が増えていくと、子どもと関わる時間は格段に減っていくのではないかと思います。

そうした中で、子どもがほかの子どもたちと関わる過程で見せる特性や、家庭で個別に見ているだけでは気付きにくい部分を拾い上げてくれているのが公立園なのかなと感じています。そういう意味では、保護者が仕事をすることで子どもとの関わりが少なくなる部分を補い、支えてくれている存在でもあるのかなと思います。

【部会長】

ありがとうございます。給食という話が出ましたけれど、やはり給食はかなり魅力的なのでしょうか。

【委員 B】

お金のことはどうしても関わってくるので何とも言えない部分はありますが、子どもにとっては、親が作ってくれたご飯もやはり嬉しいものだと思います。

実際に小学校へ入った子どもたちからは、「お弁当が羨ましい」という声もあります。そういう意味では、「頑張って作ってきたな」と思えることも、保護者としての一つの喜びです。

ただ一方で、キャラクター弁当を作るなど、とてもこだわっておられる保護者の方もいます。私はキャラクター弁当を作れないので、それを羨ましいと思いながら我慢している子どももいます。

そういう様子を見ると、みんなで同じものを食べることや、苦手なものもそれぞれ給食の中に入っていて、「今日、この子も一緒に食べていた。だから私も頑張ろう」というような気持ちになれる機会があるのも、給食の良さなのかなと思います。

また、お弁当を作る時間を使うのであれば、その分子どもと関わる時間に充てたいという思いも、保護者としてはあります。さらに、小学校に入るまでに給食というものに慣れていてほしいという気持ちもあります。

ただ、それは親の願いであって、子ども自身が本当に喜ぶかどうかはまた別の話です。子ども一人ひとりの食べる量や食べられるもの、アレルギーへの対応などを考えると、保護者がその子に合わせて準備できるお弁当の方が対応しやすい面もあるのかなと思います。

結局のところ、どちらの良さを重視するかということなのだと思います。

【部会長】

確かに、そのあたりはいろいろな良さやデメリットがそれぞれあるので、なかなか「これがよい」と言い切れない部分はありますよね。よく分かります。ありがとうございます。

少し大きな話になるのですが、持続可能性という観点から考えると、これまでの議論の中でも確認してきたように、今後、公立園の役割はかなり大きくなっていくのだと思います。

一方で、1号認定の子どもは減っていくだろうという見通しもあります。その中で、こうした機能をどのように維持していくのかという方法を、やはり考えていかなければならないと思っています。

そうしたことが、今日の議論を通して少し明らかになってきた部分なのかなと感じています。

時間の関係もあるのですが、これまでの議論を踏まえて、「これはぜひ言っておきたい」ということがありましたら、ぜひお聞かせいただきたいと思います。

まだ、次回に継続して議論していくべき内容もかなり残っていると思いますが、いかがでしょうか。

【委員 D】

ここには公立の幼稚園・こども園の学級数や待機状況が示されていますが、今、少子化が進行する中で、民間の保育所やこども園、それから幼稚園も含めて、それぞれの募集状況を見ていると、ちょうど今が募集の時期ですけれども、ある程度子どもが集まっているところもあれば、「来年はどうしようか」というような状況の幼稚園や保育園も民間にはあります。

やはり、そのあたりの数字も一定踏まえながら対応策を考えていかないといけないと思います。

伊丹ではめったなことはないと思いますが、それこそ、ある日突然保育園が閉鎖されるといったことも、全国的には起きています。

そうしたことがないように、それぞれの事業者もある程度安心できる環境が必要だと思います。

もちろん、ここでいう安心というのは未来を保証するということではありません。状況によっては施設を閉めざるを得ない場合もあるでしょう。しかし、その際にも利用者にきちんと説明でき、かつ事業者にとっても、これまで頑張ってきたことが報われるような仕組みが必要ではないかと思います。

そうしたスキームのようなものを、市全体で共有できる方向性として見いだせた方がよいのではないかという気がしています。

公立の場合には、このような場で審議を重ねながら、再配置などについて検討していくことも可能だと思います。しかし、全体として見ると民間施設のウエイトが高い状況です。今回お示しいただいた数字の中でも、公立の割合は他市と比べれば高いとはいえ、全体の中では少ない方ですよね。

ですから、その部分をすべて市場※に任せるということではなく、市場に委ねるとしても、「こういうルールのもとで進めていく」ということを、もう少し丁寧に考えていく必要があるのではないかと思います。

※市場：民間事業者の経営判断や利用者の選択

例えば、利用調整のあり方ですとか、ケアのあり方ですとか、そのあたりも施設単位ではなく、市全体で共有できるような方向性を示せればよいのではないかと思っています。

私は幼稚園の団体に所属していますので、公の方向性を踏まえて園長会で議論していくことはできますし、ほかの団体でも同じようなことができるのではないかと思います。

そうしたことがうまく機能するような方向性を示せる答申になればよいのではないかと思っています。

【部会長】

ありがとうございます。かなり重要なご指摘なので、また事務局とも相談しながら整理させていただきたいと思いますので、よろしくお願いします。

【委員 H】

私も、「公立施設の役割」「地域性」、そして「持続可能性」という三つの観点について、実は思うことがあります。

伊丹市にお住まいの方や、伊丹市でお仕事をされている方にとっては当たり前のことで、あえて言うまでもないことかもしれません。しかし、私のように少し離れたところから見ていますと、やはり「伊丹市」というものが非常に気になります。

この適正規模や適正配置の議論においても、私たちは伊丹市の地図を見ながら考えているわけですよね。

つまり、公立施設の役割や地域性、あるいは持続可能性を考える上で大切なのは、「これからの伊丹市を支える市民を育てているのだ」という視点だと思います。

特に公立施設にはそうした意識が求められると思いますし、教育委員会がこの議論を進めているということを考えても、その視点は重要ではないかと思います。

先ほども申し上げましたように、これは言わずもがなのことであり、これまであまり意識されてこなかったことかもしれません。

しかし、今後の方向性を考える際には、「これからの伊丹市を支える人を、みんなで育てていく」という視点を一つ共有しておくことが大切だと思います。

その視点に立てば、幼児教育があり、義務教育があり、さらに高校教育等へと続いていくわけですから、それぞれの接続という課題についても自然な流れの中で考えることができます。

そうしたことは、個別の議論の論点というよりも、むしろ答申の中の基本的な考え方や、私たちが目指す目標・目的として示していただけるとよいのではないかと思っています。

そうすることで、市民の方々にとっても分かりやすくなりますし、他市から見たときにも、伊丹市がどのような考え方のもとで公立施設のあり方を検討しているのかが伝わりやすくなるのではないかと思います。

【部会長】

ありがとうございます。今いただいたご意見については、次回の議論の中でもまた深めていきたいなと思いますので、よろしくお願いします。ありがとうございました。

今日も、かなり活発なご議論をいただきまして、ありがとうございました。

適正規模・適正配置ということを、「子どもの育ち」と「質の向上」、そして「公立施設の役割」と「地域性」、さらに「持続可能性」という五つのポイントから考えてきました。

特に、持続可能という観点から考えたときに、今後、公立施設の役割は大きくなっていく。その中で公立施設の機能をどのように維持していくのかという方法を考えていかなければならない。

さらに、数の問題というよりも、「何を大事にしていくのか」「どういう教育を実現していくのか」「どういう質を目指していくのか」というところを意識しながら考えていくことが大事だという、かなり本質的な議論ができたのではないかというふうに思います。

そして、そこに「伊丹市として」という視点を加えながら、そこを踏まえて数の議論にもつながっていくかと思いますので。

今日いただいた視点をもとに、伊丹市として望ましい適正規模・適正配置の方向性について整理していきたいというふうに思います。そのような形で進めさせていただいてよろしいでしょうか。

（異議なし）

ありがとうございます。
では、少し時間を過ぎてしまいましたが、これで議事の方を終了させていただきたいと思います。
もし会議終了後にご意見、ご要望等ございましたら、事務局へご遠慮なくお知らせください。委員の皆様方におかれましては、議事進行につきましてご協力いただきまして、ありがとうございました。
それでは、司会の方を事務局へお返ししたいと思います。

【事務局】
ありがとうございます。皆様、本日も大変幅広くご意見をいただきまして、ありがとうございました。
最後に一点補足なのですけれども、委員からおっしゃっていた「待機」の話ですが、この表に表示しているものは、あくまで定員を超えて1号認定の申し込みがあったというものです。
その方が保育利用も希望されているかどうかということについては考慮していない数字になります。

【委員 B】
ありがとうございます。

【事務局】
では、次回、第5回幼児教育部会につきましては、11月30日（月）、同じく13時30分から、この201会議室で予定しております。
本日配布しております資料につきましても、また次回ご持参いただきますようよろしくお願いいたします。
では以上で、本日の会議を終わらせていただきます。お疲れさまでした。